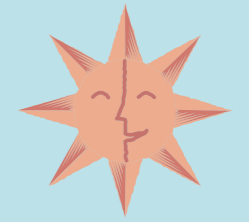


電子書籍の未来が育ち始めています。

お気に入りの雑誌や小説、人気の写真集や話題のエッセイ、
本は私たちを楽しませてくれる大切な存在です。
そんな本とのつきあい方がいま変わり始めています。
スマートフォンやタブレットで身近になってきた電子書籍の世界。
意外と知られていないその裏側をのぞいてみましょう。



電子書店
A

BookLive! 本とみなさまを結ぶ
電子書籍の本屋さん

BookLive! は、町の本屋さんのように本を探す楽しさを大切にしたい電子書店です。いろいろな端末から読めたり、ネット上に在庫が持てたり、使いやすさの追求はもちろん、様々なキャンペーンを実施する等、楽しい電子書籍ライフを叶えるサービスを提供しています。今秋にはオリジナルの電子書籍リーダーも発売！更に快適な電子書籍環境を提供します。

<http://booklive.jp/>

電子書店
B




Bitway いろいろな電子書籍を電子書店へ提供しています

ビットウェイは、書籍・コミック・写真集の分野で国内最大級のコンテンツ数を誇り、たくさんの出版社や電子書籍ストアと私たちユーザーとの出会いを支えている電子書籍の取次サービスを展開しています。

<http://www.bitway.co.jp/>

TOPPAN 3つの力で電子書籍の未来をサポート

たくさんの可能性が詰まった電子書籍の世界。トッパンは、テクノロジー×クリエイティブ×プランニングの3つの力で、もっともっと楽しい電子書籍の未来を叶えていきます。

<p>1. テクノロジー あらゆる本を電子書籍に変換</p> <p>本を印刷するだけでなく、電子書籍としても楽しめるように、最新のデジタル化技術を完備した「コンテンツファクトリー」が、本のおもしろさを支えています。</p> <p style="text-align: center;"> 本の印刷や電子化に対応</p>	<p>2. クリエイティブ 本にあたり驚きを</p> <p>紙でつくられたものをそのまま電子化するだけでなく、動く絵本や音の出る小説など電子書籍ならではのあたらしい楽しさをつくりだしています。</p> <p style="text-align: center;"> 動きや音をつけて演出する</p>	<p>3. プランニング 電子書籍を一人でも多くの人へ</p> <p>いろいろな会社とのつながりを持つトッパンが、ひとつの書籍が誰かの手に届くまでのストーリーを考え、素敵な本との出会いを支えています。</p> <p style="text-align: center;"> 電子書籍をビジネスの場へつなぐ</p>
<p>http://solution.toppan.co.jp/service/ebook.html/</p>		



hito*yume
インタビュー

田部井 淳子

巻頭特集



1975年5月16日、女性では世界で初めてエベレスト頂上に立つ田部井淳子さん(写真提供 女子登攀クラブ)

女性で初めて、世界最高峰・エベレストの山頂に立ち、
また、同じく女性で初めて、七大陸の
最高峰登頂を達成した田部井淳子さん。
七十歳を超えるいまなおあふれ出る
バイタリティーの秘密は何なのか。
田部井さんが考える山の魅力を、
大震災や原発事故の被害に苦しむ
故郷・福島への思いとともにうかがいました。



【たべい じゅんこ】
1939年、福島県三春町生まれ。1975年、女性で世界初のエベレスト登頂者となり、1992年には、女性初の7大陸最高峰登頂者となる。NPO法人日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト(HAT-J)代表として、東日本大震災による被災者への支援活動も活発に行っている。

「 一歩ごとに見たことのない風景が広がる。その喜びが忘れられず、山に登り続けるんです。」

見たことのない風景は
自分にとっては無いもの
同じ

1975年に女性で初めて、エベレストの山頂に立たれ、1992年には、七大陸の最高峰登頂を、これも女性で初めて達成されました。しかし、それに飽き足らず、以後も世界各地の山に登り続けていらつしゃいます。もう何度も同じ質問を受けていると思いますが、田部井さんをそこまで山に駆り立てているものは何なのでしょうが。

わたしの場合は、行ってみたい、見てみたいという好奇心かなあ。

山には、そこに行かなければ見ることのできない風景があるんです。とても雄大な眺めだったり、信じられないくらい美しい景色だったり。月に輝くヒマラヤの雪の美しさといったら、実際に見たことがない人には、想像もできないほどですよ。

地球上にこんなにはばらしい風景があるんだということは、実際にそこに行つて、この目で見たからわたしは知っているんです。知らずに終わってしまったら、それはわたしにとっては地球

上に存在しないことと同じになつちゃうじゃないですか。

風景だけじゃないですよ。そこには現地の人々の生活があり、食べものがあり、アクセサリがあり、文化がある。芸能があるんです。そういうものがこの地球上に存在していたということを知る喜び、知らなかったという驚き。実際にそこに行つて見なければ感じられないことですよ。

山に登つて行くと、一歩ごとに視界が開けて、いままで見たことのない風景がどんどん広がっていく。この喜びが忘れられなくて、山に登り続けているんだと思います。

でも、山は危険で命がけだというイメージがあります。実際、田部井さんのお仲間でも山で命を落とした方がいらつしゃいます。山の魅力は、命をかけるほどすばらしいものなのではないでしょうか。

確かに、山は危ないとよく言われますね。ときどき痛ましい事故が起きているのも事実です。

でも山の危険は、かなりの部分、自分でコントロールできるんです。雪崩を止めることはできないけれど、こういう

た状況は雪崩の危険があるから無理して行くのはやめようとか、このルートを行くときには、こういう準備をして、こういう装備を持つて行こうとか、前もつて考えることができます。

もちろん、判断ミスをしてしまうことはあります。山で起きる事故の中には、判断ミスが原因であるものが少なくありません。でも、判断ミスをしてしまうのも自分ですよ。

それに比べて、わたしたちが生活している街は、本当に安全だと言えるのかしら。青信号で横断歩道を渡つていったのに車にひかれたり、身の毛のよだつような犯罪に巻き込まれたり。自分の判断や自分の注意だけではどうにもできないところで命を落としてしまう危険は、むしろ街のほうが大きいんじゃないかと、わたしは思います。

そもそも自然の中には信号機はないわけですから、行つていいのか、止まつたほうがいいのかは、自分で判断しなければならぬ。人間は、それができる能力をもっているはずですよ。

また、人間は自分の足で長時間歩くことができます。これも人間がもっている大きな能力でしょ。

でも、こういった力も、使わなければ何の意味もありません。せつかくもつ

て生まれた力なんだから、もっと生かさない！ それをやらずに死んでいいのかい？ なんて、大げさかな。

田部井さんがそこまで山が好きになつたきっかけは、どんなことだったんですか。

登山のすばらしさを初めて知つたのは、小学校4年生の夏休み、担任の先生に栃木県的那須の茶臼岳と朝日岳に連れて行つてもらつたときです。

普段から三春の豊かな自然の中で遊んでいたので山なんか知つてる、と思つていたのですが、行つてみてびっくり。見たこともない植物、咲きほころぶ高山植物。湧き出した温泉が流れこんで真っ白になつた湯の川を見たときに、本当に驚きました。宿まで4時間ほど山道を歩きましたが、疲れを感じるひまさえありません。翌日帰つてからも興奮して親にしゃべり続けていたと言いますから、よほど強烈だったんだと思います。

当時は終戦直後で、食料事情もまだあまりよくありません。このときも宿に泊まるとはいえ食料は持参。「米2合と味噌と野菜を持って来いよ」と言われたのをいまでも覚えてます。

わたしにとって、知らないことを体で

感じ、自分の目で見る初めての体験となつたのがこの登山であることは、間違いない。そう考えると、先生、よくぞ誘つてくれたと、いまでも思います。

「あー、あのときに先生が言つてた……」大人になつてから気づく

当時は夏休みに担任の先生が子どもたちをどこかに連れて行くということは、よくあつたんですか？

いえいえ、やつぱり当時だつて珍しかったですよ。ましてや先ほど言ったように食べることに追われるような時代でしたから、簡単なことじゃなかったと思います。それをあえてしてくれたのは、やはり先生に心の余裕があつたんでしょね。

渡辺俊太郎先生といます。

昨年お亡くなりになつてしまつたんですが、それまでずっと、お付き合いさせていたっていました。

先生には、本当にいろんなことを教えてもらいました。

山に雪が降つて、その雪が解けて水になり、その水のおかげで植物や虫が生きていける。水はやがて川になり、海



初めての登山となつた那須の朝日岳のふもとで
(前列右端が田部井さん。そのすぐ後ろが渡辺俊太郎先生)

に流れこみ、プランクトンを育てる。プランクトンを食べた魚を、今度はわたしたちが食べる。やがて水は蒸発して雲になり……。教科書に書いてあることではあるんだけど、先生に目の前で説明してもらつると、ものすごく納得することができた。ああ、だからこんなに高い山の上でも水が湧いてくるんだつていうことがわかつて。まさに先生はわたしにとつての教科書だったんですね。理科の授業で勉強したときにはぜんぜん覚えられなかつたんだけど、先生に話してもらつたことは、こんなふうにもでも忘れられなかつたりします。

先生がおもしろかつたのは、山に行つたときだけじゃないんです。

春先、雪解けて校庭がどろどろで

使えず、体育の授業ができないとき、先生は図書室から美術の本を借りてきて、みんなにいい絵を見せてくれるの。「これがゴッホ、こっちはセザンヌ」って。そのときは、ああ、きれいな絵だなあとしか思つていなかったんだけど、大人になつてヨーロッパで美術館に行つたときに、「あー、渡辺先生が見せてくれた絵だ！」なんてことがよくありました。

天気がいいと、「今日の昼ごはんは城山で食べよう」なんて、急に言い出します。学校の近くに、城跡の山があつたんです。

草原でみんな丸くなって先生を囲んで座つて弁当を食べる。まるで、サウンド・オブ・ミュージックの映画のよう

「もう登れません」と言う勇氣

「できないことはできないと言う」のも、登山のときに大切なことの一つ。その荷物を運べるのか、運べないのか。登り続ける体力があるのか、ないのか。見栄や遠慮で「できます、大丈夫」などと言ってしまつと、後から迷惑をかけるだけでなく、登山隊全体を危険にさらしてしまうことさえあります。「できない」と言う勇氣も大切なのです。これは登山ばかりではなく、仕事の面でも同じですね。

「できない」というタイミングも問題。わたしが見るところ、女性は下山のための体力を残した上で「もう登れません」と言う人が多いので助かるのですが、男性は一步も動けなくなるまで無理してしまうケースが多い気がします。動けない人を放っておくわけにもいかず、隊全体の迷惑に。「まったく、男はどうして見栄張るんだ」と思っちゃいます。



自分の力を正しく把握することも大切なこと(2008年、ピコ・ポリバルにて)

人間関係の「ごたごた」は 当たり前。まずは相手の 話を聞いてみる

登山隊は多くの人が協力して行くわけですが、山頂に足跡を残せるのはそのうちのほんの数名だけということも珍しくないと聞きます。そのため、ともすると人間関係がぎくしゃくしがちで、田部井さんご自身もずいぶん苦労されたのだとか。

たしかにいろんなことがありました。でも、人間関係で「ごたごた」するのは、しかたのないことだと思います。そもそも人の考え方はみんなバラバラなんですからね。登山隊のようにメンバーに共通の目標があつてでさえそうなんですから、一般の学校や会社ではさぞかし大変だろうなと思います。

実はわたしは、喧嘩は好きじゃなかったんですが、いまはむしろ、喧嘩じゃ負けない、と思つてます。

たとえば、山頂を目前にして天候が崩れそうなとき、アタックするか、しないか。わたしは自分が「アタックすべきでない」と考えたら、「アタックしたい」と言っている人を必死で止めます。喧嘩になろうと、人間関係が壊れよ

先生は本当におっかなかつた！ でもあのときの先生は正しかったと思います。

しよ。食べ終わると、先生はいろんな話をしてくれる。とってもおもしろくて、先生は話をつくるのが上手だなあと。それが中学や高校の国語の授業のとき、「あれ、どこかで聞いた話だな」と思つて考えてみると、あのとき渡辺先生がしてくれた話だつた……なんてことがよくありました。『破戒』『夜明け前』『河童』。そんな、小学生にはちよつと難しい物語を、先生は上手にわかりやすく話してくれていたんですね。

そんな話の中で先生がよく言つていたのは、絶対に人は同じだ、差別してはいけないっていうこと。普段はとてもやさしい先生なんだけど、わたしたちがだれかの身体的な悪口を言つたり、人の体を指差して笑つたりしたときには、ものすごく怒られました。ピンタされたり、それこそぶん殴られたり。本当におっかなかつた！ いまならいろいろ問題にされちゃうんでしょうが、でもあのときの先生は正しかったと思いますよ。

じゃあ、田部井さんがエベレスト登頂に成功したときには、ずいぶん喜んでくださったんでしょうね。さつそくお祝いに駆けつけてくれたり……。

いやあ、そんなことは何にもなかつた。「いまは、まわりいろんな人がいて大変だろ。まあ、落ち着いてひと段落したら、三春に帰つてこいよ。酒でも飲もう」つて、それくらいでした。

ところがそれからずつと後、みんなで先生の還暦のお祝いをしたとき、急に「エベレストを見に行きたい」つて先生が言い出して。よし、じゃあ、みんなで行くつていうことになつたんです。

結局全部で20人くらいで行きました。もちろん山頂まで登ることはできないけれど、カトマンズから20人乗りのヘリコプターで山頂がよく見えるところまで行き、さらに、1時間歩きました。

渡辺先生は「いや、すごい山だねえ。淳子ちゃんはある高いところまで行つたのかい」と、ずいぶん興奮していました。

定年を待たずに退職され、お好きだつた書や絵の研究をされてました。遊びに行くところ、いろんな「いいもの」を見せてくれるんです。何だかすごい掛け軸があるから、「先生、これ何？」つてたずねると、名前だけは聞いて

うと、そんなことは気にしません。喧嘩したつて死にはしません、山で判断を誤つたら、命に関わるんですから。相手からたどえどんなことを言われても、「それがどうした」つて。

でも、一つだけ心がけていることがあります。それは、相手の話を聞くということです。たとえどんなに身勝手な話でも、理不尽な主張でも、とにかく相手の話はきちんと聞きます。

話を全部聞いてから、「なるほど、そういう考えもあるんだね。でもわたしはこう思うよ。あなたの考えとわたしの考え、こういうところが違うね」と整理して、どこが問題なのかを話し合います。

現実にはなかなか歩み寄ることができず、結果としてわたしの主張を押し通すことになつてしまつこともあります。でも、話を聞いた後は、けつこう受け入れてもらいやすくなるんですね。「自分の言うべきことは言った。聞いてもらつた」という満足感があるのかもしれない。

人々の生活を破壊もし、 また、癒しもする自然の力の 奥深さに驚く

東日本大震災や、それにもなう原子力発電所事故による被害の大きかつた福島県のご出身で、被災者支援の活動も熱心に行つていらっしゃるね。

人間がつくつたものに絶対はないんだということ、本当に深く感じました。実はわたしは事故のあつた原子力発電所を見学したことがあります。絶対安全だと言われていたのに……。あの美しい福島。おそらく、これからさき何十年も使えないであろう野や山、田畑、街のことを思うと、なんとも理不尽だと思いがあふれます。わたしたちはもつときちゃんと、知識をもつべきでした。悔やまれてなりません。

もう一つ残念なのは、時間の経過とともに、被災者、避難者への関心が薄れ、しだいに忘れられていくことです。

町ごと埼玉県旧騎西高校に避難した双葉町のことは、当初はずいぶん話題になりました。でも、いまでもまだあの校舎に200人以上の人が暮らしているつて、知つてますか。住所が騎西高校〇年〇組だとか、理科室だとかになつている。まだそういう生活を強いられている人がいるんです(2012年6月現在)。



渡辺俊太郎先生とエベレストを見にネパールへ(1994年)

生きる喜びをはぐくむ

ぶんけいの1～6年生の道徳

「読んで」「見て」心に響きます。

point.1 小学校学習指導要領に準拠し、今日的課題に対応

基本的な生活習慣、善悪の判断、規範意識などをはじめ、情報モラル、いじめ、環境、キャリア教育、食育など、今日的課題を網羅しました。

point.2 道徳の時間が楽しくなる、バラエティー豊かな作品

児童が体験を想起し共感しやすい生活文、先人の伝記、スポーツ選手に取材したノンフィクション、ドキュメンタリーなどのほか、人気絵本、漫画など感動を呼ぶ作品を精選しました。

point.3 ぶんけいだけのビジュアルを重視したワイド判

ワイド判だからこそ生きる美しいイラストや写真をオールカラーで多数収録しました。

point.4 児童が集中する見開きページ構成

必要のないページに児童の視線を行かせず、授業への集中度を高めるため、全資料見開き構成にしました。



監修: 真仁田 昭
筑波大学名誉教授
目白大学名誉教授
長谷 徹
東京家政学院大学教授

『4年生のどうとく』では、
田部井淳子さんの「富士山を救え」を
「3-(2)自然愛・動植物愛護」の資料として掲載しています。

●お話のあらすじ●

登山家の田部井淳子さんは、小学校4年生のときに初めて山に登り、そのときの感動が忘れられず山に登り続け、女性で初めてエベレスト登頂に成功した。

イギリスのBBC放送が富士山の取材をしにきたときに、田部井さんは案内をすることになった。久しぶりに登った富士山は、ゴミで汚れていた。BBC放送のスタッフにそのことを指摘され、田部井さんは恥ずかしい気持ちになる。これをきっかけに、田部井さんは、清掃活動、講演活動など富士山を守るために動き始める。



《児童書》
全学年 AB判オールカラー
1・2年 / 104ページ
3・4年 / 128ページ
5・6年 / 144ページ
定価 560円(税込)
《教師用指導書》
全学年 AB判2色
1・2年 / 232ページ
3・4年 / 256ページ
5・6年 / 272ページ
定価 2,600円(税込)



東日本大震災の被災者の方をお誘いして、鬼面山(福島県)へハイキング(2011年7月)

避難生活をしている人たちを初めて山に誘ったのは、震災から3カ月ほどのころです。わたしなりになんかできないかなと考えて、避難所となっていた芦ノ牧温泉(福島県会津若松市)の旅館に、「ハイキングに行きませんか」という張り紙をしました。目的地は裏磐梯の五色沼。不思議な色の沼を眺められるハイキングコースがあり、普段着でも大丈夫です。

わたし自身、ハイキングなんか誘っていいのかな、本当に来る人がいるのかなと心配しました。当日参加してくれた避難者の皆さんも、行きのバスの中はかなり緊張し表情も硬いまま。

ところが五色沼に着いたとたん、皆さんワーツと感動してくれて。中には子どもみたいに走り出す人も。聞くところ、避難所での生活が続くと、外を出歩かなくなるし、人と会って話をする機会も減ってしまう。

「今日は久しぶりに緑の中を歩いて気持ちがいいね、外で食べるおにぎりはうまい。あはは……」。

みんな声がどんどん大きくなって、最後には笑い声も。わたしもうれしくなりました。

それから多くの方々との協力を得ながら、毎月、避難生活をされている皆さんを、登山やハイキング、ときにはお花見に誘う活動をしています。

ある方がこう言ってくれました。「仮設住宅での暮らしになってしまったからは、まさか山に登るなんて考えてみなかったよ。でも、やっぱり来てよかった。津波で何もかも流されてしまったけれど、それは過ぎてしまったことだ。これからのことを考えなくちゃね。今日でまた一歩前進できそうだよ」。

この言葉を聞いて、皆さんを登山やハイキングに誘って、本当によかったと思えました。

それと同時に、自然のもつ力の奥深

さも感じました。原子力発電所の事故もふくめて、人々の日常を破壊してしまったのは、巨大地震と津波という自然の力です。そして、そこで打ちひしがれてしまった人々を癒すのも、また自然。わたしたち人間は、この大きな自然の前ではとても小さな存在なんだなと改めて感じます。そして、この大なる自然をもっと自分分の目で見て、自分の足で歩いてみたいと、わたしの中の好奇心の虫が、また騒ぎ出すのです。

最後に読者の皆さんへのメッセージをお願いします。

登山は、ヨイドンで始めません。みんな自分の体力、自分のペースで歩むことができます。また日本には、だれでも登れる低い山から、登山経験者だけが登るような高い山まで、さまざまな山があります。これはとっても恵まれたことです。

せつかくこの環境を楽しまない手はないと思います。皆さんもぜひ、ご自身に合ったようどいい山を見つけ、山に登ってみてください。きっと、街の生活では得ることのできない体験と、いまままでに見られなかった何かを見ることができると思います。



株式会社文溪堂
http://www.bunkei.co.jp

東京本社 / 東京都文京区大塚3-16-12 〒112-8635 TEL 03-5976-1311(代)
岐阜本社 / 岐阜県羽島市江吉良町江中7-1 〒501-6297 TEL 058-398-1111(代)
大阪支社 / 大阪府東大阪市今米2-7-24 〒578-0903 TEL 072-966-2111(代)